

第5号様式（第7条関係）

会議録

会議の名称	第2回清須市男女共同参画プラン策定委員会
開催日時	平成26年1月29日（水） 午後1時30分～午後4時00分
開催場所	清洲市民センター 3階303会議室
会議概要	1 あいさつ 2 議事 議題1 プランの素案について 議題2 パブリック・コメントについて 3 その他
会議資料	会議次第 資料1 清須市男女共同参画プラン【中間見直し版】 資料2 清須市男女共同参画プラン（案）に対するパブリック・コメントの実施
傍聴人の数 （公開した場合）	0人
出席委員	中島委員長、和田副委員長、神谷委員、原田委員、武田委員、佐藤益委員
欠席委員	山内委員、佐藤覚委員
出席者（市）	内田教育長、櫻井教育部長
事務局	（生涯学習課） 濱島次長兼生涯学習課長、栗本課長補佐、石田副主任幹、高山主任主査 （企画政策課） 岡田係長 （子育て支援課） 山田主事
会議の経過 （中島委員長よりあいさつ） （齊藤教育長よりあいさつ） 《意見の要旨》 議題 1 清須市男女共同参画プラン【中間見直し版】について	

○中島委員長

・それでは、議題に入ります。本日の議題は大きく2つあります。一つはプランの素案で、いよいよ中身を具体的につめていきます。事務局とコンサルから説明をしていただき、それについて皆様のご意見をいただく段取りで進めていきたいと思っております。では、よろしく申し上げます。

○事務局：資料に基づき説明。

○中島委員長

・今回は22頁から26頁まで確認していただきました。今日は27頁以降の4章、5章、6章、基本計画、成果目標、計画の推進体制を説明いただきました。皆様のご意見をうかがいます。また4章以前の、1章、2章、3章も後でみていきたいと思っております。ご説明をいただいた4章から、基本目標ごとにご意見をうかがっていきます。まずは28頁から32頁まで「人権の尊重と男女共同参画社会に向けての意識づくり」についていかがでしょうか。(1)人権の尊重、(2)男女共同参画意識を高める啓発活動の充実、(3)男女共同参画を推進する教育・学習の充実、の3つの方向が上がっています。この点での問題や付け加えたらいいのではというご意見はありませんか。

・ここは大元に立ち返れば人権の尊重ということになります。非常に重要な部分です。まだまだ日本では“人権”といっても理解は深まっていません。根気よく進めていかなければなりません。特に31頁の3番の教育・学習については私たち以上に次世代を担う子どもたちにとって大切になってきます。教職員への意識啓発も課題となってきますが、いかがでしょうか。

・具体的に何を素材にして意識啓発を行っていくかまでは踏み込んでいませんね。もう少し具体例があってもいいと思っております。例えば、学校の教科書だけでは子どもたちに男女共同参画を理解させるのは難しいということで、中学生の職場体験の前に男だから女だからといって職業の選択を狭める必要ないんだと、まちで実際に働いている女性の消防士さんのインタビューを紹介したり、逆に男性の保育士さんのインタビューを紹介するなどの記事を載せた簡単なリーフレットを作成して配付し、職場体験の前に活かしている例があります。さらに踏み込んだ自治体では、書き込みもできる冊子を使用して、子どもたちが男女共同参画について学んでいるところもあります。ユニークなものだと、豊田市では男女共同参画が子どもたちにわかりやすいように漫画を使って副読本を配布しています。日進市では、指定校を決めて取り組んでいるが、1年間、どのように男女共同参画について取り組んでいくかを考えて、取組前と取組後に児童たちの意識調査を行っています。清須市ではまだまだですが、具体

的なものを盛り込んでもいいかと思いますが、いかがでしょうか。

・32頁のイラストですが、今はラフな段階で、他のところにも同じものが出てきています。これは試作でこのようにイラストを入れるということだと思のですが、それにしても、カップルのイラストを見ると男性の背が高く女性の背が低い。平均身長でいくとそうですが、大学で歩いていると私より背の低い男子学生もいる。ラフなイラストの段階だが、すべて男性が高く女性が低いというのには違和感を感じます。どうなのでしょう。大林素子さんなど、バレーでたいへん背の高い女性もいます。女性が小さく描かれると女性に力がないようなイメージにもつながるので、イラストにも配慮していただけるとよいのではないのでしょうか。

○原田委員

・知らないうちに日常生活の中で染み込んでしまったものを取り除くことは難しい。中島委員長が「具体的に」といわれたが、具体的なことでハッと気づくようなことがないと、立派な言葉を並べても浸透しない。私はチェックシートをよく使っている。日常生活でこんな言葉の使い方をしていませんか、このイラストのような、女性は小さくて可愛いことがいいことだと思っていませんか、など、チェックして気づくとよい。気づく前にいろいろなことをいっても理解ができない。女性は背が高いと生意気に見えたり、なんで可愛い方が得なんだ、など、もっと具体的なことに気づくこと、知らないうちに進んでしまっている決めつけや刷り込みを解きほぐした方向で、男女共同参画の話の聞かせてもらおうと理解ができる。なかなか刷りこみは解けないが。

○中島委員長

・プランにチェックシートを盛り込むのか、生涯学習の中にチェックシートを活用するのか。男だから机を運ぶ、女だから机を拭く、などと思い込んでいませんか、というような子ども向けにチェックを試してみるのもいいかと思えます。

○原田委員

・細かいことに気がつくのは女性といわれるが、でもそうではない人もいます。気づく男性もいる。女性で力持ちもいる。

○中島委員長

・女子も学校の机は問題なく持てる。しかし、可児市で調査をすると歴然と結果が出た。小学校までは問題ないが、中学校になると「机運びは男子」と答える生徒がとても増える。女性でも十分に持てるのにそう思い込んでいる。私が

関わっている学生でも、女は弱いという。生まれたての赤ちゃんは3キロだが、5キロ、10キロと大きくなる。それを片手に、牛乳が安かったからと3パックを片手で提げて、さらに白菜も安かったからと買って、さらに自転車に3人で乗っていたりすることもあり、女のどこが弱いのか、といている。思い込んでしまっている。

○原田委員

・男性が「女性を守ってあげたい」という。

○中島委員長

・そのような、思い込みがある。

・プランにチェックシートを盛り込んでいくのがふさわしいのかどうか。具体的に皆さんにワークに取り組んでいただくことは必要であると思う。

○原田委員

・言葉の説明にしても大まかな研究会でなく、なににのワークショップだとか、なににを中心にした、など、もう一段階噛み砕くとグッとわかりやすくなる。

○中島委員長

・内容でなく、具体的な取組のところでもう少し実践的なワーク形式の取組を増やすなども明記するとよいかもしれない。

○原田委員

・なぜ今、男女共同参画を一生懸命にやっているのか気づいてもらう、何をしているのか気づいてもらわないと、なかなか耳を貸してもらえない。

○中島委員長

・大学がテスト期間中で採点中ですが、15回授業を行っていて、女子学生の面白い感想があった。今後は専業主婦でいることは難しくなる、人口構成も大きく変わるので、祖母の頃のような高度経済成長もなく男性の収入も伸びない。女性も働くことを期待されると学生に話をすると、最初の頃は「先生がなんといおうと私は専業主婦になってやる！」と思っていた学生が15回授業を受けていくと「それはもう無理だとわかった。自分も働く。将来設計を考え直したい」と感想に書いてきた。最初は抵抗して、祖母も母も専業主婦だった、私もその生き方でいく、と思っていたのが、情報を受け学ぶ中で変わってくる。周

困の男性、女性が既存のままだと気づかない。学生の中でも多い。どこまで具体的な取組をプランに盛り込むのか難しいが、もう少し踏み込んで書くといいかと思います。

○原田委員

・目線を少し変える。ただ言葉を聞いているだけでは効果はない。ハッとするものがないと、実生活を変えていくまでに及ばない。頭で聞いているだけでは他者のことまで考えられない。DVも自分と関係ないことで終わってしまう。

○中島委員長

・より気づきを促すような、具体的な学習方法を取り入れていくということになるでしょうか。

○和田副委員長

・今は非常にスピードが早い時代になっているので、企業は四半期ごとに見直しをしている。PDCA というが、プラン、ドゥ、チェック、アクション、この繰り返しを行っていく。プランを立てた後に5年間このプランを使うということは、PDを始めたら5年間そのままいくというプランになる。これはその後の動きが認識できないと、作ったものが陳腐化していく可能性が高い。現実に起きている内容だけでプランを作ることは、来年、陳腐化する可能性がある。アメリカやヨーロッパ、オランダ、フランスなど進んだ国をターゲットに考えてほしい。1年目、2年目、3年目と、コンサルにも数値目標をもってプランを作らなければならないといわれている。数値目標を作ってもらいたい。

○中島委員長

・そのような意味で53頁以降の成果目標で5年後を掲げて、そのあと第6章に出てくる推進体制ということで、清須市ではこれまでは前プランを作ったあとで進捗状況を確認していくことがなされていなかったようだが、今後、プランを作った後は会議も恒常的に開いて、1年でどこまで進んだか進んでいないかをチェックしながら取り組んでいかないと進んでいかない。

・企業の場合は細かく取り組んでいるので、進まなかった場合はどこに問題があるのか立ち戻って改善を図る。行政においても男女共同参画においても、同様に取り組んでいかないとプランを作っただけでは進まない。プランに即しながら、次年度以降、進捗状況を確認していく中で、新しくこんな取組を入れたらいいなど、皆さんで諮っていただいたり、逆にこれはもう十分だからいらないのでは、など担当課とやりとりをして進めていかなければならない。

・これからは時代が急激に変化していく。団塊の世代の頂点は 67 歳になったが、今後 5 年間で 72 歳になる。後期高齢者の手前になる。高齢化率もかなり高くなる。プラン自体も課題だが、プランの推進体制をどうするかも重要になるので、6 章もしっかりご検討いただきたい。

・先に、基本計画についてご意見をいただいたが、より具体的なことをプランの中に書いていただくということでよいでしょうか。よろしいですか。では、そのようにさせていただきます。

また、ご意見があれば検討をすることとし、次にうつります。

・基本目標の 2 にあたる「政策・方針決定過程への男女共同参画の拡大」33 頁から 35 頁ですが、ここで気づかれた点などありますか。

・私は最初の 33 頁の（1）市におけるポジティブ・アクションの推進の 2 つ目のパラグラフの最後の箇所に“市役所における女性管理職の割合も平成 25 年 4 月現在で 12.4%に留まる”とあるが、これは保育士も入れているんですか。保育園の園長も入れての値ではありませんか。

○事務局

・入っています。単純に、管理職手当をもらっている職員という意味合いです。

○中島委員長

・手元に清須市が国に出された最新の資料があるが、ここには管理職の在職状況ということで一般行政職における管理職の総数が 64 名、女性が 3 名とあり、女性比率 4.7 となっている。これはどういうことでしょうか。

○事務局

・主幹以上、清須市でいう課長職以上が 3 名だと思われます。

○中島委員長

・通常はこちらのデータでとっていくので、12.4 というと民間企業の管理職の比率が日本では 10%程です。行政でそれ以上に比率が高いところは少なく、むしろ行政では少ないのが現状です。これを 12.4 と書いてしまうと女性比率がたいへん多い地域だと見られてしまう。現状を把握しないといけない。名古屋市でも 5.5%、いちばん多い知多市で 19%です。美浜町は高く 23.6 だが、どの地域も軒並み 2%、4%、6%といった状況です。これは、明記しておかないといけないのではないのでしょうか。主幹以上、と注釈を入れるのいいかと思われます。主幹は管理職に入るが、いずれにしても 12.4 も少ない数値です。どこを基準にするか曖昧ですので、注釈は付けておいた方がいいかと思わ

れます。

○和田副委員長

・34 頁、(2) 女性のエンパワーメントへの支援で“女性自身の意識の醸成、能力の向上が不可欠”とあるが、このためには子どものときからキャリア・デザインを学ぶことが大切になる。小学校の高学年からキャリア・デザインは必要である。将来、自分がどういう仕事につきたいか、そのために高校、大学、就職とどのようにキャリアを形成していくか、男性も女性も考えていかないといけない。

・企業も考え方が変わってきて、今後は女性でも男性でも能力のある人材しか採らない。

○原田委員

・女性ならいいわけではない。能力のある女性に育てていかなくてはいけない。芽を摘まないで、持っている資質を育てていけば管理職にもなれるが、今は能力が追いついていかない。ただ女性であればいいなど、数値を上げるために採用されてもいけない。人材を育てることが先決。

○中島委員長

・そうすると具体的には、生涯学習課だけでなく教育課も入れた方がいいでしょうか。

○原田委員

・その通りです。子どもの教育の中にキャリア・デザインという認識をもってほしい。企業は、学校を出たときに一定以上の能力がないと、新人を採用せずに派遣社員を採る傾向に変わってきている。派遣社員を採って、他で教えていた人間を採って、3年使ってみてOKであれば正社員にする。社会構造が変わり、新卒の時点でキャリアを持っていることが重要になる。小学校の高学年、中学校の時期にある程度のキャリアを持たなければいけないのだ、という意識を持たせないといけない。私たちの子どもの頃のように何でも適当にやっておけば世の中が引き上げてくれるような時代ではない。少子化でもあるし、子どもたちにキャリア・デザインの意識を持ってもらえるよう、プランにも入れたい。

○中島委員長

・学校教育課を入れる。確かに諸外国と比べると、日本は理系に進む女子が少

ない。進学率も、日本は大学だけをみても女子が12%程少ない。女子だから勉強はいらぬ、女子だから文系でいい、という考え方がどこかで作られてしまっています。

○原田委員

・家庭の中にある。母親がいちばん影響している。知らないうちに子どもに母親がそういつている。

○中島委員長

・女の子らしさ、に関わっているのが母親である。

○原田委員

・女性のエンパワーメントを促す学習会は必要です。また「作ります」といつて、作った後の成果や評価が目に見えてこない。今回はそうならないようにプランに描くだけでなく、描いたらどうなっているかまで見ていかぬといけぬい。

○中島委員長

・資料で補足をしたらよいか。しかし、女子の進学率や文系・理系の調査は行っていない。国全体ではあるが、市ではやっていない。

○原田委員

・急激な変化には対応できない。私たちも時間をかけてここまできた。親世代と話をしたり、子どもを育てる親の意識が大事。しかし、刷り込まれているので、解きほぐすことに時間がかかる。なぜ、これをするのか、反対を押し切つて進めるのかという壁にぶつかるので、取り除くところから始める必要がある。じゃあ、と簡単にすぐ取りかかれるものでなく、壁ができている経緯も理解した上でどこで止まっているのか、なにが重くのしかかっているのか、取り除いてあげないと日常生活に関わっているので、うまく前に進んでいかぬい。

「いい講座を受けた」「そうだったのか」と思つて皆さん帰るが、家庭の中で講座で感じた思いを達成される場面がない。生活の中でそんな思いも消えてしまう。それを繰り返している。日常生活を変える学習会、意識の持ち方の勉強会をしないと駄目だと思ふ。

・日常生活に感じた思いを取り入れて、生活を変えていくことは、女性や母親にはなかなか出来ぬい。男女二人が一緒に講座を聞いて「そうだね」と互いに意識を持って家庭に帰る、いいものを二人で取り入れるなどいいが、女性だ

け一人では、自分だけでは難しい。初めは、同じレベルの人と始めて、皆がいっしょに知識を持つとよい。現実には講座に来てもらうことも難しい。講座に来る時間がある人だけが来るのも妙な話である。

○中島委員長

・そういう意味で、出前講座も行っていかないと広がっていかない。豊田市では、3年前にプランを改訂し、地域で年に2回は学習をしている。豊田市は合併で大きくなったが、旧朝日町などで出前講座を行っている。出向いていくと、皆が行くから、と足を運んでくれる。そこで吸収して帰っていく。センターなどで集まってください、で開いているだけでは難しい。

○原田委員

・児童館や市民センター、公民館などに出向いて、寸劇で訴えるやり方はとても好評だった。継続できたらいいと思っている。

○中島委員長

・出前講座は検討していただきたい。出前は、市民が「出前してください」といって成立するか。しかし、こちらから押しかけるスタイルにしないと広がらない。出前の注文もなかなかない。機会を見つけて押しかけて行うことにしないと難しい。豊田市は公民館が充実しているが、公民館の利用者懇談会の時間を利用して、一時間弱の時間を男女共同参画のワークショップで皆が楽しめる形で始めている。男女共同参画という言葉も知らなかった方が、まず知る機会になる。機会を捉えて、出向いていって、十分な理解に至らなくてもエッセンスだけでも理解してもらえようような押しかけ的な講座をやらないと浸透していかない。

・先日、豊田市で、男性だけの講座に押しかけ的な感じで行ったが、最初は怪訝に思っていた方たちが、今の日本の状況を話すと理解してくださる。男女共同参画を進めなければ、と認識を改めてくださったりする。まだまだ知らない人が多い、続けていかなければならない。

○原田委員

・不安に思っている人もいる。一生懸命に活動していると怖がって、どうなるかと不安になる。正しい知識できちんと時間をかけて話せば理解していただけるが、一つの事柄だけをとって聞いていたり、女性だけが強くなったと誤解されていて正しく理解されていない。広めるには誤解のないよう、皆にわかりやすく進めていくとよい。

○中島委員長

・キャリア・デザインを描いていく場を学校の中から取り組んでほしいという点、人権意識にも関わってくるが誤解を解くような形でわかりやすく提供する場をさらに増やすということを進めたい。

○和田副委員長

・教育現場で、国の文科省から勝手なことはやってはいけない、というような話などはあるのか。

○事務局

・そのようなことはありません。現在の教育現場の現状では男女共同参画の認識が異なっている。例えば、小学校では児童会長などに積極的なのは女性の方が多いくらいである。私たち世代の印象と現状は異なるのではないかと思われる。教育現場においても、校長、教頭、教務主任とあるが、能力がある方を登用するようにしている。ただ、能力がある方に私たちが登用してお願いをしたいと思っても、女性側に性差意識があって、子育てを大事にしたいのでその仕事は受けることができないといわれたりもする。そんな現状がある。また、小学校の児童会長は女性が非常に多いが、中学校に入り思春期になると変化して、女性らしさというものを自分たち自身が意識してしまう。目立つことをやると異性から嫌われるなどと思う子どもたちがいる。給食でも、小学校まではたくさん食べていても、中学校になると食べたくても我慢するなど、自分自身の中で抑制してしまう現実がある。性差と男女の平等感をどのように捉えていくか問題である。

○中島委員長

・性差とは、身体的な差の意味でいわれたかと思うが、それこそがジェンダーであり刷り込みである。

・学生たちに教育をしていくと、同様な発言をする。小学校までは活発だったが、だんだんと男子の目を気にしていくと。原田委員の意見のように、可愛い女の子でなければ好かれないと思込まされている。実際に、なにか生意気な発言をすると「女のくせに」といわれたりする。社会環境や「生徒会長なんかやったら女らしくない」と親がいたりする。独身の大学教員が話していたが、自分の母親はかなり活発な女性であるが矛盾していて、結婚などの話になると古風なところがあって自分を縛ってくる。このように、女の子たちは矛盾したメッセージを受けている。男女平等だから男女は同等の能力があるから頑張れ

と社会からメッセージを受けることと同時に、女性だから控えめにいないと男性社会から嫌われるというメッセージも受けている。ここで大きな矛盾が生じる。この矛盾を突破できる女の子はよほど意識が強いのか、または親が子どもを支えていかないと突破できない。

・アメリカのCEO、facebookのトップ2の方で、シェリル・サンドバーグさんという方が書いた『リーン・イン』という本がアメリカでベストセラーになり、日本でも日本経済新聞出版社から出版されている。ハーバード卒の女性だが、キャリアを上りつめていくと女性たちがいなくなる、なぜなのかというと女性たちが上っていくことに怖れを感じていると書いている。シンデレラ・コンプレックスという言葉もアメリカで80年代から使われているが、職場で誰も成し遂げられなかった仕事を成功させてしまったら、私は人並みの幸福とされているような結婚は手にできないのではないかと不安を感じて女性自身が抑制してしまう。シェリル・サンドバーグさんはまたこうも書いている。同じ業績をあげても女性は自分の仕事を過小評価する傾向がある。男性は同じ業績をあげても自分の仕事を過大評価する傾向がある。

・それはつまり、女性は小さい頃から「控え目に、控え目に」とメッセージを受けつつ育ってくるので、同じ仕事をしていても控え目に表現することしかできない。ところが男性は「前に出ていきなさい、前に出ていきなさい」と小さい頃から仕向けられてくる。また「お前が一家を支えるんだから」と過剰に期待され、前に出ていくことになる。女性が同じことをすると嫌われる。ある女子大の感想文で私も“先生みたいな強い女は嫌われます”と書かれたことがある。そういうことである。私は夫にも愛されているので何も思わないが、二十歳前後の女性がそんなふうにいると思うとたいへん悲しくなる。男の子に嫌われてもいいじゃないか、本当に自分を好いてくれる人がいればいいので、男に嫌われることを気にして小さくなって生きる、女の人生が型にはめられていることの方が悲しくないか、と話している。授業の最後に自分がこれからどう生きたいかを学生に書かせているが、これまでは専業主婦、または男性に頼って生きることが女性のあり方だと思っていたが、対等な関係で生きていきたいということを最後には書き出す。やはり教育が大切で、ご意見のようにキャリア・デザインなどがしっかり教育されていけば、決して女性は劣っていない、必要以上に下手に出る必要がないと理解できれば堂々と発言ができる。

・バイト先で理不尽なことがあって、これまでは黙っていたが、これからは意見が言える女性になりたいと書いてくれる学生もいる。やはり身近に良いイメージがない。私自身は母親にいわれても前に出ていくタイプだったが、大人の女性でも前に出ていくと周囲に「あの人は生意気だ」と思われたりする。男性

がやると「立派だ」といわれることが女性は「生意気」となってしまいうので、女性には壁があるといわれる。管理職比率 43%のアメリカですら、女性たちが壁の前で自分を萎縮させてしまう傾向があるので、日本ではもっと女性たちをエンパワーメントで背中を押してあげないと難しい面がある。一部の女の子はめげずに頑張っていると思うが、シェリル・サンドバーグさんではないが、アメリカの facebook のような大きな企業で CEO になるような女性でもそんな吐露をしているくらいなので、仕事ができる女性も豊かな結婚生活を送っている女性は多くいるなど、ロール・モデルも必要である。キャリア・デザインを含めて必要である。

・愛知県では昨年から、女性の管理職候補者の養成を始めた。オープニングの総論で話をし、感想で書かれた内容を後で聞いたが、会社の推薦でその講座に出席する流れになっていたが、会社から推薦されて出たものの本当は自信がない、という感想もあった。また、ある企業の男性の人事の方は「これからの女性リーダーは従来の男性リーダーの真似をする必要はない」といっていた。従来とは違うリーダー像で、女性たちが会社や組織を引っ張っていけばいい、私もそう思っている。この話を第 1 回目で話をしたら「研修に出ること自体に足がすくんでいたが、自分らしくリーダーをやったらいいと聞いたら、やれそうだと思えてきた。従来の男性のリーダー像を追いかけなくていい、自分らしさを活かしながらリーダーができるならやってみたい、一歩踏み出してみたい」という感想がかえってきた。

・女性たちも自分の力を活かしたいと思っているが、男性と違った形でどうやったら力が活かせるかを悩んでいる女性たちは多い。中学生の女の子も同じで、潑刺としてリーダーであって男性にも好かれてというイメージがわからない。なので、従来のままのおとなしいイメージに自分をもっていってしまう。しかし、気づけば変わる。授業でも、世界中の女性のリーダーたちを見せる。素敵な女性はたくさんいる。自分を小さくしようとしなくても、自分らしくいけばいいと気づくことが大切だ。キャリア・デザインを学ぶことと合わせて女性リーダーのロール・モデルを提示できれば女の子たちも元気になる。そういった励ましも必要ではないかと思う。

いろいろご意見をいただきました。

・次の 36 頁から 38 頁、家庭や地域社会における男女共同参画の拡大については何かご意見はありますか。

・ここで、簡単なことで表現だけ直していただきたいところがある。36 頁の(1)の 3 行目“アンケートによると、共働きをしている女性であっても、男性と比較して長時間家事・育児・介護に関わっている傾向に”とあるが、「長時間家事」は一つの単語に読めてしまうので、“男性と比較して、家事・育児・介護

に長時間関わっている傾向に”と入れ替えてもらえるとよい。

・地域の活動など、他はいかがか。清須市では、地域の役職についている方が比較的多かったと思う。自治体の女性比率0が多い中で、78人自治会長がいる中で3人女性会長がいて、3.8となっている。これは誇れる数字ではないかと思われます。

○和田副委員長

・PTA会長をしていたが、今は、高学歴でいい大学に入り、いい会社に就職するという考え方である。

・以前は、地元で工場を立てて地元で仕事をやっているの、PTAに行くとき引き受けてくれ、となるが、今は地元志向の者もない。サラリーマンを目指して他の土地に出てしまう。これも社会の流れだが、地元で家で仕事をしている者が少なくなると、地域と人との繋がりが希薄になる。世の中の動きがグローバル化していく中で、地域と人がどのように接していくかを考えて、企業に育児休業や介護休暇などあるのと同様に、サラリーマンをやっているPTA会長をやっている人を前提に行政も地域を支える人材を活かすよう風土をつくっていかねばいけない。市内の会社に努めている人には助成したらどうか、と意見したこともある。地域には産業がないと栄えない、いい人材も外に出てしまう。寝るために帰ってくるだけでは地域で活動してもらえない。名古屋市に移ってしまっは意味がない。地域の居住者やPTAの役職者をサラリーマンであっても優遇するなど検討できないか。良い人材を地域に留めようという認識がないとうまくいかない。女性たちも働きに出ているので、誰が地域のことを行うかという高齢者になる。若い世代が育たない。自分も、PTA会長を努めていた延長線上でここにいる。若い世代も積極的に地域で活動できるような取組がほしい。

○中島委員長

・これまでは女性が家庭にいたので、地域で活躍する人材もいた。女性たちが働くようになると高齢者しかいなくなる。しかし、地域には抱えている問題が多くある。特に、防災などが大きな課題だ。清須市の女性会は防災に力を入れていると聞いている。女性会も高齢化していますか。

○原田委員

・新しい人に男女共同参画の講座を受けてください、といっても、働くことが最優先されるので時間がとれない。ワーク・ライフ・バランスが重要。男性だけでなく、女性も広い知識を得るために社会に積極的に出ていく、PTA活動に

出ていくためにも企業が協力をすることが必要。子育ても女性だけの仕事ではない、男性とともに両方がいいところを出し合って協力して子育てをしてほしい。働きやすい環境を整えることをしない限り、実現化は難しい。

○中島委員長

・では、基本目標の（４）も続けてご意見をうかがっていきます。これもいつも思うことだが、自治体でワーク・ライフ・バランスを議論していても、国全体の取組でないのでもどかしい面がある。労働基準法や最低賃金の問題が改善されなければならない。昨日も『クローズアップ現代』で放映されていたが、女性の半数以上が非正規雇用で、愛知県岐阜県でも最低賃金が700円、東北方面だと600円代になる、フルタイムで働いても月に10万円になるかならないか。そうなると仕事を掛け持ちせざるを得ない。それも無理となると、『クローズアップ現代』で取り上げていたような風俗産業に入っていくしかない。風俗だと密室で1対1の関係になり危険も伴う。心身に負担の大きい仕事なので精神のバランスを崩していく女性も出てくる、と紹介されていた。日本の場合は、労働基準法自体が戦後できたままである。労働基準監督官も少なく、一人でかなりの案件を抱えていて監督しきれずに、ブラック企業が横行してしまう。自治体で就労関係の整備について考えるときにいつも思うが、自治体レベルでは限界がある。産業課が頑張っても、国の情報を流すことはできても、市独自でなにができるかという、インセンティブを多少付けて入札の際の加点にできたとしても抜本的な改革にならない。

・ここは悩ましいところである。せめて、清須市という組織自体でワーク・ライフ・バランスを実践していただくことが必要だが、この点も全国の自治体のように公務員のワーキング・プアが広がっている。正規職員だけではまわらないので、臨時職員を入れてようやくまわしている現状がある。

このような現状がどうしたらいいか、非常に悩む。

○和田副委員長

・大学生で学生結婚し子どもが生まれて、男性が子どもの面倒をみるということで女性が仕事に就いたが、結局意見が合わずに離婚し、子どもを抱えたままうちの会社にいる。その女性も働いているので、今後は会社に託児機能を持つと考えた。保育園を経営している知人に、30人以上の子どもが集まらないと保育園と認められないと聞いた。1人、2人で行う場合は、保育に対しては届けを出すことにとって無認可保育所として認められている。今後、すべての企業が託児機能を持つべきという流れに変わってくると思われる。今年から、保育士の免許をもつ人を雇って始めようと考えている。これによって、高学歴の

女性を採りやすいなど、企業のアピールにも繋がる。男性が子どもを預けて帰りに迎えに来ることにも繋がる。働く環境を整える面からも積極的に行っていきたい。市でも、地元の企業がこんな託児・保育機能を持っているとアピールしてもらえると、今後の広がりにもつながる。

○中島委員長

・和田副委員長のところに、他の企業からも一緒に子どもを預けたいと申し出があったらいいのではないか。

○和田副委員長

・それもいいが、企業内に作られるのもいい。

○中島委員長

・ベネッセの託児所ができたときに資生堂と一緒に入れてくれ、となった。両方が運営する形で、両方の従業員が利用するという。どちらも企業イメージが上がる。社屋が近いという面もあって、ベネッセが作った託児所に資生堂も入って、となった。このような形もあるので、和田副委員長が始めるところに、他の企業が運営資金も出したいというような仲介を清須市が行うのは無理でしょうか。画期的なことになると思いますがどうでしょうか。

○和田副委員長

・名古屋市で保育園をやっているが、要請があれば行政が企業にノウハウを教えるし、保育士も派遣するといっていた。

○中島委員長

・素晴らしい。豊田市などでは企業が託児を行っているが、働く女性のために取り組んでいる。

○原田委員

・病院も充実している。

○中島委員長

・市役所の方が保育園に子どもを預けようと思ったらフルタイムなので優先的に入ることができる。一般の企業の場合は、勤務形態によっては最初の選考ではねられる場合もある。企業内託児には 40 頁に出てくるインセンティブをもっと与えたらいい。企業内託児に相乗りしたいところがあれば増やしていくの

も方法である。

○原田委員

・プランに明記したらいい。具体的な例を出す方がよい。

○中島委員長

・市がどのような応援ができるかわからないが、一般企業の企業内託児について文章化できないか。

○和田副委員長

・30人以上という規定がある。無許可なので、問題が起きる可能性がある。基準が必要ではないか。

○中島委員長

・林文子市長の横浜市は待機児童を無くしていったが、どうやったかというところ、人気のない無認可の保育施設に横浜市が補助金を出した。整えれば人気が出るであろう施設に補助金を出して、非正規を正規にして保育士を雇ったり、リフォームを行って一定の基準を満たしたところを横浜市が横浜保育園として認定を出すようにした。国の基準と別に横浜市が認定するという方法である。市民も、市が認定してくれたと入所を希望し満杯になって運営もうまくいっている。清須市でも和田副委員長の動きがあるので、これを後押しするようなシステムを作っていけたらいい。最初は2, 3人でも30人になれば認可になっていく。

・清須市にとっても、市が作った園以外に保育施設ができることは目玉になる。子育て世代を取り込むものになる。これはプランに活かしたい。画期的なことである。今すぐ結論は出ないと思うが、中心になる児童課と和田副委員長の取組をどのように市として動くか、上の方たちと検討していただきたい。市が後押しして損にならない話である。

・保育園の枠として30人は大きいですが、定員に達していけば認可保育園になるし、市も保育児童の定員が増えて対外的にもアピールできる目玉になると思われる。

○和田副委員長

・30人いなくても施設の基準は満たしていかないといけない。満たすことで安全な保育ができる。事故がいちばん起こしてはいけない。国の基準のレベルの保育所にして、病院や救急対応ができるなど企業に働きかけをしない限り、企

業は動かない。しかし、それをやっつけていかないと企業も残っていけない。

○中島委員長

・不動産屋の HP を見ると、この地域は子育てがしやすいかなども書かれている。A 地区は子育てにこのような支援があるから B 地区よりもいい、など書いてある。積極的に子育て支援に関わるべき時代になっている。清須市ではこのような保育施設ができるなど、不動産業者にも情報を渡すとよい。

・また病児保育もニーズが高い。東浦町ではかなり前から病児保育を始めていて、若い世代も多い。トヨタ系の企業も多いが病児保育が当たり前になっている。子育て世代の方に渡すパンフレットの中にも病児保育と書いてある。日進市でも“おりど病院”が採算は合わないけれども病児保育を始めると、隔離室を作っ始めている。病院の事務局長に審議会でお目にかかり、なぜ始めたかを聞いたが、病児保育だけでは採算が合わないけれどもその後に、おりど病院を利用してもらえれば将来的には採算があっていき、社会的な意義もあつて始めたといっていた。清須市でも、どこかの病院でそのような意向があればタイアップしてはどうか。総人口そのものが減っていくので病院の差別化も必要である。企業内託児、病児保育があれば、ここに引っ越しをしようと思ってもらえる。実際、東京では、どこに保育の空きがあるかで転居する。あるいは夫婦が別居もしてでも預かり先を探していく。『就活』ではないがこれを『保活』というそうである。この地域ではそこまで激化はしてないが、ニーズはあるので、和田副委員長の取組も初めてうかがったが画期的なことであるし、市も積極的に情報として外に流してほしい。

・40 頁にあるインセンティブ、これは動機づけという意味だが唐突で一般的には浸透していないので巻末などに用語の説明を付けた方がよいと思われる。男女共同参画を進めるのに、このインセンティブが今流行りである。『くるみん』もその一つである。仕事と家庭が両立しやすいような育児休暇の体制を整えている企業には『くるみん』という厚生労働省が認可したマークを付与している。名古屋市では子育て支援を行っている企業には入札の際に加点が付くなど、これもいろんな自治体が行っている。これを総称してインセンティブといっている。男女共同参画に積極的に取り組んでいると何かしらの特典があるとして、動機づけを進めている。国でも 21 世紀職業財団では、女性を積極的に活用している企業が登録ができる。これを HP で一覧を見ることでできるので、学生が企業選びに活かすことができる。インセンティブは必要である。

・和田副委員長のお話は画期的で聞いたことがないので、市として検討していただきたい。

○和田副委員長

・今、どこもやろうとしている。大企業の子会社はやろうといっても、親会社がちょっとね、という。

基準をしっかりと満たしてやりたい。

○中島委員長

・企業内託児が親には都合がいい。昼時間に見ることも一緒に食べることもできる。お迎え時間のロスも少ない。

・この問題点としてアメリカで聞いたのは、アメリカでは基本的に貧困層しか保育園がない。アメリカで女性の社会進出が進んでいるのは企業内託児があるから。しかし解雇になると仕事も子どもの居場所もなくなってしまう。アメリカにはそういう問題点がある。保育園を一般的に利用できるようになっていない。日本では、広く保育園が整備されていて、そこに加えて企業内託児を進めていけばいい。

では、時間を超過してきていますが、基本目標4についてはいかがですか。

・次に、基本目標5 福祉の充実と生涯にわたる心身の健康づくりについて、ご意見はありますか。

・女性も男性も自殺者が多いなど、いろいろな問題があるが、いかがでしょうか。44頁の冒頭、“障害のある人”の“害”は自治体によっては平仮名にしているが清須市はどうですか。

○事務局

・障害者基本計画や障害福祉計画の中の表記は、法令名や固有名詞以外は平仮名を使用しています。

○中島委員長

・では平仮名でお願いしたい。最近自治体の配慮で“害”の文字は使っていない。平仮名を使う自治体が増えてきた。45頁の“ゲートキーパー”も用語解説に入れていただきたい。46頁の“ハイリスク妊婦”という言葉も一般的に使うのか。高齢や慢性疾患を持っている妊婦をさすかと思うが。単語によってレッテルを貼られてはよくないので、何か問題を抱えた、というような他の表現に変えていただきたい。また“思春期保健における「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」”とあるが、ここは学校教育課も関係してくるのか。リプロダクティブ・ヘルス/ライツにも解説が思うが、妊娠、出産、中絶、性病の問題である。看護大学でも教えていて看護大学の学生は知っているが、一般の学生はほとんど知らない。「排卵期ってなに？」と聞いたりする。毎日新聞で2

年程前に見たが、妊娠出産についての知識の有無をインドも入って 18 か国くらいで国際比較をしたら、日本女性の知識は 17 番目であった。質問はマルバツ式の簡単なもので、問には“健康な女性であれば妊娠出産できる”というものもあるがこれはバツである。年齢が高くなると妊娠しにくくなる。実際、キャリアを積んだ後に妊娠出産を考えたらいいとあって、いざそうなる 30 後半から 40 代では妊娠しにくくなる。自然妊娠や出産は 40 代ではかなり難しい。不妊治療をしても 40 代に入ると 10%を下回る。しかし、知らない女性が多く、学校でも教えていないので、不妊治療をしたら妊娠出産できると思っている。私も 15 回の授業の中で入れているが、大妻女子大学では就活のガイダンスの中で自分のライフスタイルも考えなさいと指導している。女性は 35、36 を境に妊娠しにくくなるから、この点を考慮した上で職業人としてのキャリアも考えなさいと話している。これは学校教育課で取り組んでいただきたい。

・日本の場合は中絶可能期間が 22 週目までだが、生理が少し遅れてしまうと 22 週はすぐ経過してしまう。産まざるを得ない状況に追い込まれてしまう。中学や高校生では産んで育てられない。望まない妊娠をしないためにも知識の啓発がある。避妊をしていない、という学生も多い。授業の感想の中に書いてくる。正しい知識を持つためにも学校教育課でも取り組んでいただきたい。

・次に、47 頁からのあらゆる暴力の根絶、DV など一連の問題であるが、表記の問題だが、「DV」「ドメステック・バイオレンス」と出てくるが統一をしなくてよいか。「DV」だけで通じますか。

○原田委員

・ドメステック・バイオレンスと DV が別のものだと思っている人もいる。

○中島委員長

・併記して、以下、DV と略す、としていただくのがよいかと。以前より理解は進んではいますが。

・48 頁には「デート DV」が上がっているので、子育て支援課だけでなく学校教育課も加えていただきたいがどうか。

・中学生でも男女に限らず、付き合ってる相手の携帯を取り上げて「こんなメールは消せ！」といたりすることもあるようだ。「デート DV」がどんなものか、子どもたちが知らない。大人になると本当に DV になってしまうといわれている。相手のプライバシーを侵害することは「デート DV」だと子どもたちに話す事が大事である。

○原田委員

・どこまでが暴力かという認識がすごく甘い。言葉で相手を傷つけることもわかっていない。聞く機会もなく、知識が足りていない。

○中島委員長

・女の子は、彼氏が自分のことを好きだからするんだ、と暴力は愛情表現だと思っている子もいる。
・統計調査の自由記述でもそういう面は出てくる。

○原田委員

・それを許すことがまた愛情だと思っている。

○中島委員長

・保健の時間などに一言でもいいので「デートDV」について話していただきたい。

○原田委員

・ある部分では知識があるが、常識がなく偏っている。幼稚な部分もあるので危険である。

○中島委員長

・50頁 連携体制の充実の具体的な取組の中で“市役所内の連携体制、情報共有体制を強化するためのプロジェクトチームの立ち上げの検討”とあるが、検討でなく“立ち上げます”にできないか。実際、子育て支援課を中心に、連携チームは動いていると思われるが。

○事務局

・プロジェクトチームということではなく、各課で連携して行っています。児童虐待では毎月会議を開き、連携をとっています。
・児童虐待は強制的に介入ができますが、DVで子どもがいない状態では難しい。本人からもSOSがないと対応は難しいのではないかと。

○中島委員長

・受け皿は同じなので、市役所にも児童虐待のチームがあるならばそこにDVにも対応すると書いておけば、実際にそこが動くなら、あります、と書いた方がいいと思うがどうでしょうか。検討してください。
・他にいかがでしょうか。

・51 頁、市民・団体の声の 70 歳以上の方の“現実てきなこと”と平仮名であったので表記を直していただくようお願いします。

・では、第 5 章の成果目標に進みます。

・今回は成果目標を丁寧に立てており、アウトプットとアウトカムを立てている。図式の考え方の順序が、成果指標と活動指標で本文と異なるがどうでしょう、統一をしたいと思いますが。表記の仕方を工夫していただきたい。本プランの～の説明と図式が逆なので混乱するので、成果指標の文字級数を 1 ポイント上げるなど統一をお願いしたい。

・また 55 頁の基本目標 3 にある、家庭における平等感、41.9%、34.7% というような微妙な数字の根拠はなにか。もっときりのいい数字がいいかと思うが、この数字に根拠があるのか。現状より数%あげるということか。

○原田委員

・目標値がとても低い。

○事務局

・平等感の微妙な数値についてですが、きちんと手元に数字があるわけではないが、前回からの上がり幅、国や県の数値などを参考にしながら微妙な調整をした値です。

○中島委員長

・では、第 6 章の計画の推進体制に移ります。その後にもまた全体を通してご意見を伺います。

・60 頁（2）市民参画による推進体制で、この推進会議が男女共同参画推進会議（仮称）というものになると思われる。“計画期間中の男女共同参画推進会議（仮称）の立ち上げをめざし”ではなく“立ち上げます”としていただきたいと思うのだが。推進体制がなくては進まない。庁内の推進体制も実は明確に決まっていない。事務局となる生涯学習課が外部にお願いして連携してという形になるので、自治体によっては課長クラス、部長クラスで庁内推進会議を進めているところもある。事務局からただお願いをするだけでなく、定期的に年に数回でもいいので開いていく体制が恒常的にほしい。そうしなければ広がらない。

・例えば進んでいる自治体では、浜松市では男女共同参画推進委員が各課にいる。年度毎に委員が変わり、担当になると庁内にまわってくる情報を周知したり研修会には出席するなど、システムチックに動いている。男女共同参画の研修を受ける機会にも繋がる。課への情報発信の責任を担うことにもなってい

る。

・よく行われている方法としては、プランの策定委員会を職員の方で作っていただき、プラン策定の市民の会議と事務局を通じて庁内の職員の策定委員とがやりとりする自治体もある。今回はそのような形では進めていないが、庁内の推進体制については恒常的にアクションをおこしてほしい。

○原田委員

・めざしているだけでは進みません。

○中島委員長

・そのとおりです。男女共同参画プランは全庁に関わります。庁内に横断的な組織を作っておかないと職員にも理解いただけない。大府市は前から取り組んでいて、課長級、部長級の会議がある。それにより予算にもつながりやすい。階級毎に会議をもつ自治体は少ないが、せめて横断的につなげる会議は行っていただきたい。

・例えば先程の「デートDV」では、子育て支援課、学校教育課が絡むとなると、やはり事務局を介してだと時間がかかる。一堂に集まる会議があればスムーズに推進できる。ぜひ、そのような取組をしていただきたい。

(2)の市民参画による推進体制はすでにこの会議もあるので、年に2回でも行って進捗状況を確認しておくような形にしていただきたい。和田副委員長のお話のように、プランを作っても、どう実行しているかチェックしていかないと進んでいかない。ぜひ、ご検討いただきたい。これにより61頁にあるような連携も強いものになっていく。事務局の下に各関係各所の推進会議ができればより有機的に動いていける。

○原田委員

・60頁 下から2行目“女性の会をはじめとする～”と書いてあるが、ここはなぜ“女性の会をはじめと～”なのか聞きたい。私たちは男女共同参画の『えみの会』で、県とも繋がっているし、講習会も受けて毎月定例会も行っている。それなりに活動しているが、いつも“女性の会をはじめとする”となっており、私たちは女性の会から何か指導を受けるのか、とも思っている。この点を詳しく教えていただけないか。

○中島委員長

・市内で男女共同参画に積極的に関わっている会ということで併記していいかと思うがどうでしょうか。

○原田委員

・男女共同参画の講習を女性の会に勧めても、なかなか受けてもらえない。私たちは20年前から活動している。

○中島委員長

・前から踏襲して書かれていただけなので、市は、えみの会でも問題ありませんか。

○事務局

・特に問題はありません。

○中島委員長

・“女性の会やえみの会など～”でよろしいのでは。

・では、市で一度、表記については検討していただくことにします。いろんな市民を巻き込んでいくことは大事である。

議題 2 清須市男女共同参画プラン（案）に対するパブリック・コメントについて

○中島委員長

・次にパブリックコメントの日程について説明をしていただきます。

○事務局：資料に基づき説明。

○中島委員長

・日程を考慮すると、本日議題であがった根拠などは間に合わないと思われませんが。

○事務局

・公表までには修正でいないと思いますが、パブリック・コメントの意見をいただく間に修正をかけて最終的には根拠も入れていけるかと検討いたします。

○中島委員長

・パブリック・コメントの説明もありましたが、全体を通していかがでしょうか。

・前に戻りますが、3頁からの男女共同参画の歩みで、清須市がありません。ここには入れておいた方がいいと思います。清須市も合併などあったが、(3)の前に、清須市の動向を入れたい。パブリック・コメント公表までには無理だとしても記録として残した方がいいのでお願いしたい。

・表現について、15頁1行目に句読点のマルが抜けている。18頁ポイントの記述で“今後いわゆる団塊の世代”とあるがすでに団塊の上の世代は高齢になっている。“すでいわゆる団塊の世代が高齢者になりつつある今”など、進行形の表記にしておかないと実態と異なるかと思えます。

他にいかがでしょうか。

・日程の確認になりますが、本日いただいた意見はある程度反映させて2月5日以降市民に公表し、意見をいただき3月7日で締め切り、もう一度この会議でパブリックコメントと皆さまの意見を集約して最終的にこのプランを確定させていく流れになります。

全体的なご意見はありませんか。なければ、その他に移ります。事務局にお願いします。

3 その他

○事務局

・パブリックコメント終了後に第3回策定委員会を開催させていただきます。集約作業もあるので、17日の週か最終週の2週間あたりの日程となりますので、よろしくをお願いします。

○中島委員長

・他にご意見がないようでしたら事務局にお返します。

○事務局

・長時間のご審議ありがとうございました。以上で第2回男女共同参画策定委員会を終了させていただきます。

閉会（ 午後4時 閉会 ）

会 議 の 結 果	審議に関する事項はなし
問 い 合 わ せ 先	教育委員会生涯学習課 052-409-6471（清洲市民センター）